

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.45 (2022年3月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部

事務局：〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町3-6

沖縄県立芸術大学附属研究所

久万田研究室気付

<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>

E-mail : okinawashibu.toyo@gmail.com

【第77回定例研究会記録】

日時：2022年3月6日(日) 13:30～15:30

オンライン開催 (Web 会議ツール Zoom)

研究発表1 鈴木杜萌

「沖縄の公民館三線サークルに見る地域との互恵性とアイデンティティ ―嘉手納町、北谷町、沖縄市の事例を中心に―」

■発表要旨

1960年代以降、沖縄本島で三線を学ぶ場所は研究所(稽古場)が主流となり、そこでは三線の先生たちが師弟関係において教授を行ってきた。しかし、1980年代以降、公民館では住民が主体となって三線を習い楽しむサークル活動が広まった。本研究は、この公民館での三線サークルの実践について、音楽活動の拠点が公民館であることの特徴を考察したものである。調査は、1990年代において、多くの公民館で三線サークル活動が確認できた嘉手納町、北谷町、沖縄市を中心とした地域を対象に、文献調査と参与観察を実施した。論文では、三線サークルの活動の当事者として、三線サークルの参加者、地域および公民館関係者、三線の先生を想定し、三者の関係性に焦点を当てた。本発表では、このうち三線サークルと地域および

公民館関係者の関係性について明らかになったことを中心に述べた。

対象地域である嘉手納町、北谷町、沖縄市は、嘉手納基地に隣接する地域であり、基地建設に伴う土地の接収と人口流入を経験し、県内各地からの移住者を含んだ新しい地域コミュニティが構築されてきた。地域活動の拠点となる公民館において結成された三線サークルは、エイサーなど地域芸能における地謡や、祝典の音楽を担うなど、三線のもつ機能によって地域行事に貢献できることを原動力に活動し、地域もまた彼らを必要とし信頼してきた。事例として、《かぎやで風》を含む「三節」での幕開け演奏を担うために立ち上げられた沖縄市宮里サンシンサークルを挙げ、参加者が幕開けに熱心に取り組む様子と同時に、彼らの演奏が地域にとっても不可欠であるとする自治会長の考えを提示した。

さらに、三線サークルの活動において公民館は、アイデンティティ確立の拠点となっていることを述べた。嘉手納町東区三線クラブでは、《比謝川小唄》を演奏する際に、東区内にある比謝川や屋良ムルチ(泉)について、歴史や汚染の問題などが活発に語られており、楽曲を通じた地域についての語り「地域のわれわれ」という地域的アイデンティティを確立させている例を示した。また、東区三線クラブの参加者が「東区の手」と話すように、それぞれの三線サークルには「この手」

と呼べる、固有性が認識された演奏方法があり、これを共有することで「三線サークルのわれわれ」というアイデンティティが確立されている可能性も指摘した。

以上から、三線サークルにとって公民館は、三線の演奏によって地域との互惠性が成り立つ場所であり、さらに楽曲を通して地域を語り「この手」を共有することによってアイデンティティを確立する拠点にもなっていると、発表をまとめた。



(鈴木杜萌氏の発表)

■傍聴記

本発表は、鈴木杜萌氏が2021年3月に沖縄県立芸術大学大学院に提出した修士論文の概要発表であった。近年、公民館は生涯学習の場としてだけでなく、地域社会と人々が繋がる場として再評価されている。また、戦後の沖縄本島中部を歴史的文化的に考える際に米軍基地の存在が切り離せないことは周知の事実で、芸能と基地の関係を上げた先行研究も少なくない。鈴木氏の配布資料「修士論文目次」の項には明確に記されていないが、本研究は、本島中部の基地周辺に位置する公民館における三線サークル活動の背景に米軍基地が大なり小なり関わっていることを指摘し、そこから論を進めていく。公民館と米軍基地、三線サークルと地域アイデンティティ、一見すると関連のないように思える事象について参与観察を伴いながら考察した、独創的な発表であった。

発表内容については発表者自身による要旨を読んでいただくことにし、以下では質疑応答を中心にまとめた。

まず、久万田氏から「三線サークルメンバーの年齢層やメンバーの入れ替わりの有無」について質問があった。鈴木氏によれば、「現状としては60代が中心で70～80代もおり比較的高齢者が多い。ただし、例えば北谷町宮城区の三線サークルは設立から32年経つが、現メンバーの多くは20年前すなわち40代の頃から参加しており、以前は10代もいた。また、エイサーが地域に根ざした地域では、地謡に憧れて若い人が入ることもある」とのことであった。加えて、久万田氏からは「基地建設の影響で移住した後に作り上げられてきたアイデンティティは、古くから歌い継がれてきた民謡よりも戦後創作された新民謡を通したほうが構築しやすいのではないか」とのコメントもあった。それについて鈴木氏も同意し、「現基地内に本来の出身地(字)があるが戦後に移住せざるを得なかった嘉手納町東区住民のように、戦前の字だけでなく、1970年に定められた行政区改革に基づいた旧行政区住民意識と現行政区住民意識という複層的な地域アイデンティティがある。だからこそ、広域から移住者が集まった東区で《比謝川小唄》のような新しい歌が地域を語る歌として適している」との回答があった。

続けて遠藤氏から、「基地周辺の自治公民館と基地周辺ではない地域にある公民館(三線サークル)との違いについて」と、「沖縄県外における三線サークル活動との違いについて」、二つ質問があった。鈴木氏からは、「基地周辺とそれ以外の地域の公民館の違いは、地域の行事を誰が担うかという点にある」との回答とともに、「基地周辺の新住民が集まる地域であれば地域行事を誰が行うかは同等になるが、元々三線の先生(やリーダー的な人物)がいるような地域であれば、(後継者育成に繋がる)三線サークルを開催する必要も誰に任せるかを考えることもないかもしれない」との私見も挙げられた。また、愛知県で三線サークルに参加していた鈴木氏自身の経験から、「沖縄県外における三線サークルは公民館のような地域拠点を基本的に持っておらず、またその活動も沖縄に憧れる人々が集う同好会のようなもので、沖縄に詳しい人に「先生」として語ってもらうことがある。一方で、沖

縄県内の三線サークルは、公民館を自宅のように活用し、さらに自文化意識を持って三線に取り組み、自主的に勉強し教え合う姿が多く見られた」と回答があった。

以上の質疑の応答は、沖縄県内外どちらでも実践者として三線サークル活動に携わってきた鈴木氏だからこそ語ることのできる言葉だったように思う。

最後に、発表における資料の用い方について一言申し添えておきたい。発表者は口頭発表に併せて、プレゼンテーションソフトを用いた視聴覚資料による画面共有と、研究発表の前提となる用語説明も含めた箇条書きの配布資料を準備した。発表中の画面共有では地図や図表、映像などが文字とともに提示され、口頭発表を補完する視覚情報として見やすかった。しかしその一方、口頭と共有画面で示される情報と配布資料の言葉の表記が異なったり、口頭発表で取り上げた事例が配布資料には一部しか載っていないなど、せっかく用意した配布資料がうまく機能しておらず、オーディエンスに若干の混乱を与えてしまったように思う。示唆に富む興味深い発表であっただけに、事後に内容を反芻し難い配布資料となってしまったことを残念に思う。学会発表に関わらず、対面あるいはリモートで、口頭発表に加えて投影や手元配布といった複数の資料を並行して用いることは、もはや珍しいことではない。ライブで行われる口頭発表の視覚的補助という意味でも、カタチが残る記録媒体としても、伝えるべき内容が的確に提示できる資料となるよう心がけたい。

(長嶺亮子：沖縄支部)

研究発表2 山本佳穂

「1966～2019年の歌三線公演におけるプログラム構成と『女性ならではの演奏』に関する考察」

■発表要旨

本発表は、修士論文「女性による歌三線演奏の現状とその評価—社会的環境の実態、楽曲分析、関係者の認識を通して—」の内容をもとに、琉球古典音楽の歌三線公演におけるプログラム構成か

ら推測される演奏曲目の男女間の偏りとその背景、また女性歌三線奏者に対して求められる「女性ならではの演奏」の実態について考察を試みたものである。

これらの考察を行うにあたり前提となるのが、しばしば言われる「女性に向いている/向いていない」という表現で、歌三線に携わる人々の間で当たり前に共有されている認識である。しかし、これは明文化されていない上、客観的根拠に乏しいまま継承されているという問題を孕んでいる。

1966～2019年にかけて行われた歌三線公演における演奏曲目とその演奏者について調査したところ、女性が公演で演奏できる機会が限られている楽曲が多いことが分かった。そこで、女性によって演奏される機会がほとんどない楽曲について、楽曲そのものが持つ特徴を曲想や旋律構造の分析を通して検証したところ、演奏者の性別を男性あるいは女性に限定する客観的根拠は見当たらなかった。つまり、演奏者の性別を決定しているのは楽曲そのものの音楽的特徴ではなく、プログラム決定における前例主義と、それによって拍車がかかった女性の歌三線演奏に対する違和感や先入観であると言える。

以上を踏まえた上で、女性の歌三線演奏が実際にどのように受け止められているかについて、関係者へのインタビューや新聞記事などでの言及のされ方を通して調査した。その結果、女性の演奏には概ね好意的であるものの、そこで期待され、女性奏者自身も心がけるのは、「女性ならではの」の繊細さや柔らかさであることが多いことが分かった。男性の演奏が男性性にとらわれない多様な評価を受けているのに比べると、女性の演奏は明らかに女性性と強く結びついており、音楽表現の幅が狭まっていると言える。また、本来女性が質の高い演奏を実践するための手段であるはずの「女性に適した歌い方」が、「女性ならではの演奏」と同一視され、女性奏者が増加した現在でも体系化されていない現状も、女性の演奏が「女性ならではの演奏」に終始している要因であると考えられる。

「女性ならではの演奏」はそれ自体がネガティ

ブな意味を持つものではないが、現在は女性奏者自身も聴き手もそれを過度に求めている傾向があると思われる。今後、「女性ならではの演奏」が数ある女性による歌三線演奏のうちの一つにすぎないと捉えられるようになることが望ましい。そのためには、女性の演奏に触れる機会を物理的に増やしていくことが不可欠で、黙認されている演奏曲目の制限も取り払う必要がある。また、「女性に適した歌い方」を早急に体系化し、その上で「女性ならではの演奏」を研究することで、その先に女性性から解放された一演奏者としての立場を確かなものにできると考える。



(山本佳穂氏の発表)

■ 傍聴記

山本氏の研究は、女性の歌三線奏者をめぐる諸問題を音楽的分析と社会的コンテクストから紐解いた研究であり、発表は修士論文の第3章と第4章の内容を中心に行われた。発表者は、第3章において1966年から2019年にかけて行われた歌三線公演における曲目を調べ、女性が演奏の機会に恵まれない楽曲が多数あり、演目によって男女間に偏りがあることを示した。またこれまで「女性に向いていない」と言われていた《二揚下出し述懐節》を事例の一つとして取り上げ、歌詞の内容や楽曲の音域、実際の演奏を比較した結果、男女間における演奏の質の優劣は殆どないことを明らかにした。更に演奏者の性別によって楽曲が限定されるのは、歌三線公演のプログラムの構成が未だ前例に基づき決定されていることに加え、聴衆

が女性演奏者に対する違和感や演目に対する先入観を持ち続けていることが原因だと述べた。続く第4章ではインタビューや新聞記事などの文献資料をもとに、女性三線奏者の演奏の評価と現状について掘り下げている。女性の歌三線奏者が出現したのは、1980年代であり、当初は音楽面についてはあまり議論されず、女性演奏者の物珍しさばかりが注視されたが、2000年代になると女性の演奏者も増加し、その技量の高さは男性の演奏者にも認められるようになった。一方で、新聞記事などでは男性の演奏者の評価は多面的な言葉で表現されているのに対し、女性の演奏者の評価は、「きめ細やかさ」「柔らかさ」など「女性ならではの」という性別にとらわれた表現が多用されている状況にある。更に女性演奏者自身も、地声を用いて男性の演奏に近づけることよりも、女性の声に向いている、女性ならではの表現を追求する方向に傾いていることを示した。最後に発表者は女性による歌三線演奏の展望について、女性の演奏の機会を増やすことに加え、演奏曲目の制限を取り払い、女性に適した歌い方を研究することによって、女性性にとらわれない解放された一演奏者としての立場を確立できると述べた。

山本氏の研究は、女性歌三線奏者が誕生し、沖縄の社会で受容されていく過程を聴衆や同業者の評価から多面的に捉えていた。またプログラムの演目の分類は詳細であり、これまで「女性に向いていない」と言われていた演目を楽曲分析し、その価値観が音楽的特徴ではなく、これまでの前例や聴衆の反応によって決定づけられていたことを示したのは大変興味深い。直接、発表者に質問出来なかったが、発表者が歌三線を習得していく過程において起こった疑問や葛藤が研究に反映されているように感じた。話は逸れるが、傍聴記の執筆者が研究しているバリのガムラン音楽も、女性の演奏者が1980年代に登場し、沖縄の事例と同様に30年程経過してから演奏者として認められるようになってきている。またバリの女性ガムラン演奏者の評価も当初、衣装などの外見的な評価ばかりが目立ったが、近年は「男性に引けを取らない力強い演奏」というような表現で、音楽面が評価

されるようになってきている。バリのガムランのような器楽主体の演奏と歌三線のように声楽が伴う演奏では、技術的に目指す方向性が異なると思うが、社会的な評価というところでは共通している点が見られ、異なった文化の事例も含め考察することにより、山本氏の研究はジェンダー研究としてより発展する可能性を感じた。新型コロナウイルスの流行により、文献資料による調査が中心であったが、今後、演奏者への聞き取りを増やし研究をより深めてもらいたい。

(鈴木良枝：東日本支部)



(オンライン開催の様子)

(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 45 編集委員
遠藤美奈、小川恵祐、古謝麻耶子、
多和田真理、長嶺亮子
次号 No. 46 は 2022 年 8 月に発行予定